

青森県の農業地域区分

工 藤 雅 士

I はじめに

青森県の農業経営が一樣に行なわれていないため、生産構造及び技術構造を多面的、総合的に示す農業所得に地域差が生ずる。これがいかなる条件の下に結果づけられるかを分析し、農業所得及び経営形態の類似する地域をグルーピングして区分図を作成した。

筆者は青森県の農業地域区分を行なう際、作目編成、収入源を明らかにする指標として生産額構成を用いた。生産額構成は単位地域の主体的な経営を知るうえでの最後の指標である。生産額構成を規制する条件として土地利用と土地生産性があり、両者の関連のうえで生産額が成り立つ。オ二指標としてオ一指標の組織を包含した農業所得を用いた。伊藤郷平氏によれば農業所得の高低は農業経営の規模と組織を示し、反収所得は土地の自然的、経済的条件による農業生産技術の所産を示めている。

II 土地利用について

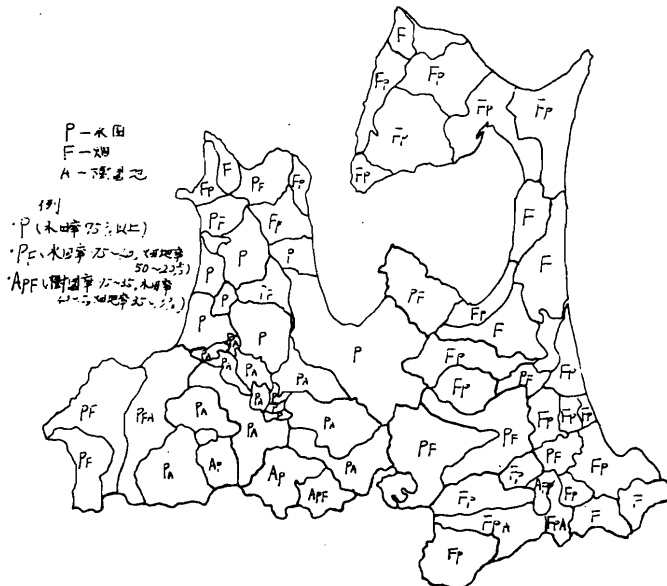
土地利用は農業地域区分する際決定指標とならないが、生産性、生産額構成、農業所得を分析するうえで重要である。

青森県における土地利用は水田43.5%, 畑35.1%, 樹園地21.4%となっている。筆者は75%以上の単一作物による利用を単一作目とし、

二作目による組合わせは

オ1図 土地利用図(1965年農業センサスより)

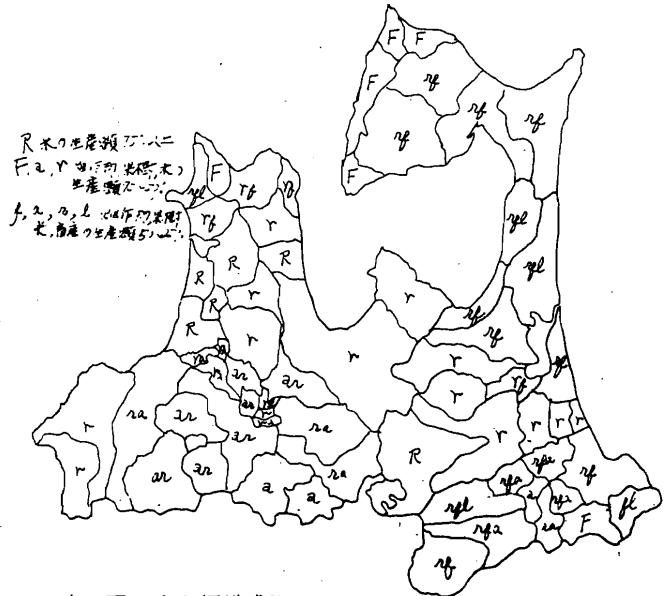
主作目(75~45%) 従作目(50~20%) また三作目による組合わせは主作目(75~35%) 従作目(40~15%) 副作目(35~10%) として各市町村の比率を二れにあてはめ、水田単一の場合はP, 畑主樹園地が従の場合PAの様な記号で表わしたのがオ1図である。水田は県内に普遍的に経営されているが特に水田率の高い地域として津軽平野北部から青森平野にかけて集中しているPFの地域は津軽半島北部、西海岸、三本木原に点在している。



PA は津軽平野中南部に集中している。畑卓越地域 (F, FP, FPA) は下北半島から三本木原台地、南部丘陵地まで広く及んでいる。

Ⅱ 生産性について

昭和40年農業所得統計によると青森県の農業専従者一人当りの粗収益 (労働生産性) は36.6万円、10a 当りの土地生産性は4.8万円で全国平均の労働生産性は33.8万円、土地生産性4.8万円となっている。県平均を100として各市町村を指数で示したのがオ1表である。これから気付く



オ2図 生産額構成図
(1965年農業所得統計より作成)

ことは労働、土地生産性の一致は極少数の市町村に限られている。また津軽平野部では土地の労働生産性に対する優位性、三本木原台地から南部丘陵にかけては土地生産性に対する優位性がうかがえる。土地生産性の高位地域は表2からも分るように弘前市を中心に存在している。

オ1表 土地生産性と労働生産性の関連 (市町村別)

労働生産性				森 田	常 盤	
	140	六 戸 下 田		稻 垣	碓ヶ関	浪 岡 尾 上
	120	三 沢 下 北	十和田市 今 別 五 戸 三 戸	青 森 鰺ヶ沢 木 造	五所川原 岩 木	弘前, 大鰐 黒石, 平賀 田舎館, 藤崎 板柳, 鶴田 柏 , 南部
	100	むつ, 東北 十和田町 天間林 六ヶ所, 七戸 新 郷	八戸, 蟹田 車力, 中里 田子, 福地 倉石	蓬 田 西目屋 金 木 川		
	80	平館, 三まや 深浦, 岩崎 市梁, 野辺地 横浜, 川内 大間, 東通, 風間浦 佐井, 脇野沢 階上, 南郷	平 内 小 泊 大 畑			相 馬
	指数	8 0	100	120	140	土地生産性

表2 生産性の高位地域

土地生産性				労働生産性			
地域名	指数	粗収益	主要部門	地域名	指数	粗収益	主要部門
1 常盤	187	90(千円)	米, 畜産	1 常盤	164	600(千円)	米, 畜産
2 藤崎	167	80	果樹, 米	2 森田	140	512	米, 果樹
3 尾上	160	77	米, 果樹	3 稲垣	129	471	米
3 板柳	160	77	果樹, 米	4 下田	126	464	米
3 南部	160	77	果樹	5 尾上	125	456	米, 果樹
6 弘前	152	73	果樹, 米	6 浪岡	122	446	果樹, 米
6 田舎館	152	73	米	6 六戸	122	446	米
8 平賀	147	71	米, 果樹	8 碓ヶ関	121	443	果樹
9 浪岡	144	69	果樹, 米	9 藤崎	119	436	果樹, 米
9 相馬	144	69	果樹, 米	10 平賀	117	430	米, 果樹
11 黒石	142	68	米, 果樹	11 南部	117	428	果樹
11 大鰐	142	68	果樹	12 板柳	116	425	果樹, 米
13 柏	140	67	米, 果樹	13 田舎館	115	421	米
13 鶴田	140	67	米, 果樹	14 五所川原	111	406	米
15 森田	135	65	米, 果樹	14 上北	111	406	米
16 五所川原	125	60	米	16 本造	110	403	米
17 岩木	123	59	果樹, 米	17 十和田市	110	401	米
青森県	100	48		青森県	100	366	
全国	100	48		全国	92	338	

南部地域にも僅かに見られるが津軽との比に値しない。南部地域において労働生産性の土地生産性に対する優位性は相対的であって、絶対的に高位なのではない。南部地域で土地生産性が低い理由として自然的条件に影響されるが、最も根本的な事はそれらの条件を基礎としている農業経営構造が問題なのである。都市近郊における野菜・畜産における生産性の追求に対して中央市場に遠いという決定的なハンディがあるため集約的に商品生産を目的として畑作経営をしている地域は少ない。下北半島部から三本木原にかけては（土地利用でF.P.が支配的）土地生産性で100を越す地域は存在しない。表2で土地生産性の高位地域は主要部門（生産額が25%以上の作物）では大部分の地域が果樹を含んでいる。米と果樹（りんご）の形態では米もしくはりんごの生産性の高いことを意味する。40年統計では米の10a当りの粗収益は5.5万円、果樹は11.4万円ということからも果樹の優位性がうかがえる。一方労働生産性については主要部門が米の地域がつまり木造、稲垣、下田、六戸、上北、十和田市等の地域が現われてくることから、米のりんごに対する優位性がうかがえる。労働生産性については津軽平野北部の米、中南部の米とりんご、三本木原の米作中心地域に分けることができる。つまり津軽平野北部は労働生産性の追求中南部の米とりんご地域においては土地生産性の追求、三本木原では労働生産性の追求が結果的に主体をなしている。

Ⅲ 生産額構成について

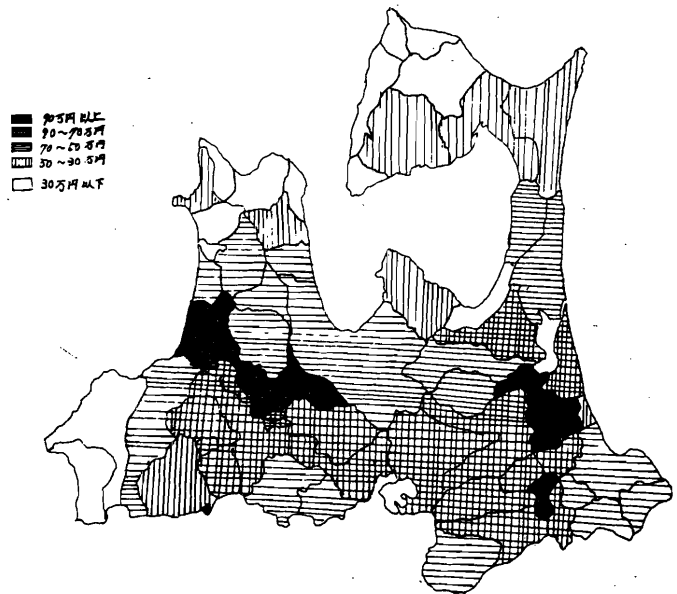
農業生産額構成は産地立地要因によって左右される。第一の立地要因は農業的自然条件—中

でも農業気象条件（温度と水）と農業的地形条件（地形と土壌）一が作用する。才二の立地要因としては経済市場条件があげられる。しかし立地要因と生産額構成という前に立地要因と経営形態という対置を考え、現実の生産額構成はむしろ経営形態を条件としている。

青森県における土地利用および生産額構成での基幹作物は米であり、全国に普遍的に作付されており唯一の商品作物であると同時に自給的作物でもある。農業生産額構成は農業の経営組織と生産力の最後の段階のものである。これを規制する条件としては土地利用と土地生産性があるが、この指標は経営組織が作目編成を規制するという論理から発展する筆者は各市町村の生産額構成を求め、米はR畑作物はF、果樹はA、畜産をLとし75%以上の場合R、F、A、Lとし、75~50%はr、F、a、l、50~25%はr、f、a、lとして記号で表わしたのが才2図である。

Ⅶ 農業所得について

農業経営を総合的指標で見ると農業所得があげられる。農業所得は自然的、経済的、社会的条件を基盤として成り立つ農業生産の現象を貨幣で如実に示したものであり生産力そのものを現わす。農業所得に関する資料が不足ゆえ、市町村の粗生産額を農家戸数で除した



農家一戸当りの粗収益で 才3図 農家一戸当りの農業粗収益（1965年農業所得統計より作成）代替した。本来の生産力を見るうえでは多少問題があるにせよ、農業所得をうかがうには可視的である。

青森県の農家一戸当りの粗収益は66.8万円（全国平均53.4万円）である。常盤、森田、板柳においては7桁農業が展開されている一方低い地域は風間浦の8.4万円、三厩の8.7万円40万円以下の地地は大部分下北半島部と津軽半島北部に集中する。これを図示したのが才3図である。70万円以上の地域が津軽平野中南部と三本木原から南部地域にわたって分布している。弘前を中心に板柳、藤崎、浪岡、岩木等々、一方三戸、名川、南部、新郷、五戸ではいずれも水田の土地利用が主体的でそれに果樹作が加わった農業経営が展開されている。前述したが果樹は米に比して土地生産性が著しく高いことから、これらの地域は土地生産性の追求

(投下労働力及び経費の多いことを意味する)により農業所得を高額たらしめている。また同じ70万円以上でも五所川原, 木造, 稲垣さらに十和田市, 六戸を中心とする三本木原台地においての経営とは趣を異にする。中でも津軽平野北部と三本木原台地における米作は異なる。前者は土地利用

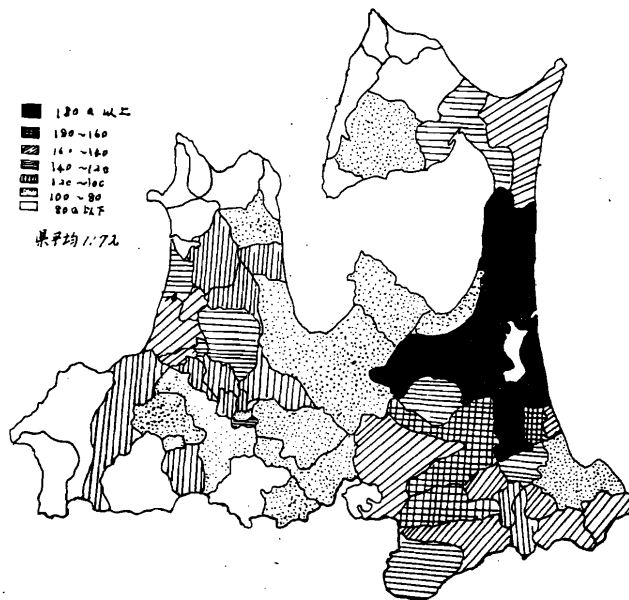


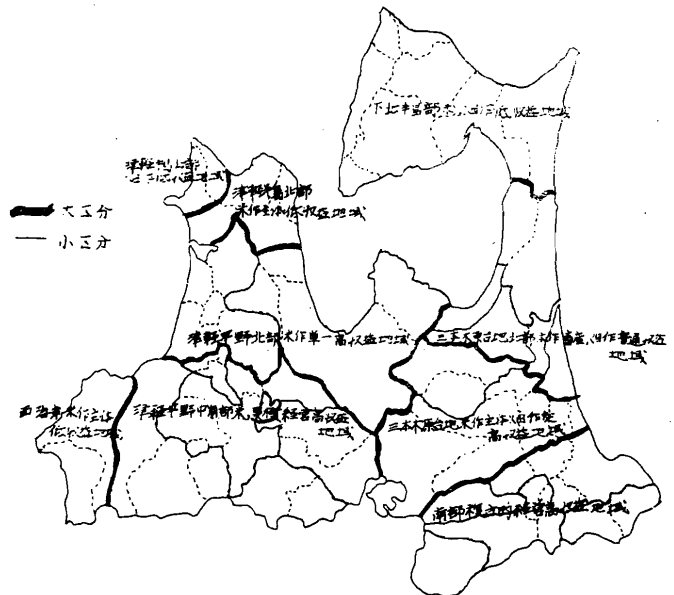
図4 経営規模面積 (1965年農業センサスより)

図からも分かるように水田率が著しく高く, また米の10a当りの収穫量も高い。従って生産額構成では米の占める割合も大きく70%以上である。しかも一戸当りの耕地面積が1ha以上であり, いわば米作により土地, 労働生産性を追求し農業所得を高めている地域である。後者においては十和田市, 上北, 十和田町を除いてはいずれも畑が主体であり, 米の10a当りの収穫量も450~500kgと県平均の480kgと同程度である。一方畑作物の10a当りの粗収益は六戸町で2.2万円と米とは著しいひらきがある。従って生産額構成では土地利用と作目が逆転する。畑作経営は副次的であるが, 耕地面積も広いから米作+畑作のタイプで経営が展開され収益を高額のものにしていく。70~50万円の地域において叙述すると, 土地利用においてはAP, APFの果樹主体地域, P, PFの米作主体地域, F, FFの畑主体地域と種々の経営様式に見られる。農業粗収益は土地生産性×経営規模という観点からも見ることが出来る。横浜, 六ヶ所では経営規模が2haを越すが土地利用ではFFで畑作主体となっている。畑作物の粗収益は10a当りの土地生産性は2.8万円, 2万円と著しく低い。従って経営規模の広さで土地生産性の低調さをカバーして農業粗収益を高めるまでには至っていない。天間林, 七戸についても同様のことが言える。米の10a当りの収穫量は450kg未満で県平均以下, 畑作物の10a当りの粗収益は2万円以下, 平均の10a当りの土地生産性は3.5万円以下と県平均を下回る。八戸, 田子福地, 階上, 南郷についても同様のことが言える。

Ⅵ 経営規模面積について

農業所得は生産力, 経営規模, 土地集約度その他経済的条件として消費地への距離等による

条件を包括した総合的指標となりうる。従って経営規模は農業所得を分析するうえで一つの指標となるが、単一で成り立つのではなく、生産性の関連、土地利用との関連で考察しなくてはならない。農家一戸当りの経営規模を現わしたのが才4図であるが、これによると平内、青森、平賀を境としてまた横浜、六ヶ所を境



才5図 1965年青森県の農業地域区分

として大別できる。つまり津軽平野では経営規模が1ha前後に集中、三本木原台地では1.5ha以上、南部丘陵地域では1.5ha前後に集中、下北半島部では東通を除いては1ha未満に集中している。具体的に叙述すると津軽平野中南部では経営規模が県平均の117aに満たないため土地生産性の追求が即農業所得の追求になる。津軽平野北部の米作単一地域では経営規模が1haを越すが大規模とは言い難い土地利用が生産額構成を決定している。土地生産性(米の10a当りの収量)も車力、中里、金木、蓬田において低いため平均的所得となっていると思われる。但し木造、稲垣はこの限りではない。三本木原台地を中心とする地域は150a以上の経営規模で大規模に近い生産額構成ではr(米50~75%)が支配的である。10a当りの米の収量は決して高くないが水田面積の広さというよりは、畑作経営も加わった経営形態が高所得をもたらしている。南部地域においては米作、畑作、果樹作、畜産の複合的経営が高額たらしめている下北半島部においては畑作が主体的であり、生産性(10a当りの畑作物の粗収益は脇野沢の3.6万円が最も高い)も2万円前後に集中している。一畠の10a当りの収量は350kg以下である。平均の10a当りの土地生産性は畑の4.2万円が最も高く他地域は3万円未満で著しく低いし、経営規模も小さい故低所得である。

Ⅶ むすび

以上青森県の農業地域区分するにあたって生産額構成と農業所得の二大指標で区分し、さらに土地利用、生産性、経営規模で分析した結果才5図のような区分図ができた。

(イ) 南部複合的経営高収益地域

米の栽培農家が最も多いが大部分が自給的である。僅かに米が主体的に経営されている地域と

して八戸，五戸，福地，倉石があげられる工芸作物が主体的経営地域（階上，南郷）と果樹主体的経営地域（南部，名川，三戸），その他工芸作物と米の田子，米と工芸作物と畜産の新郷と多岐にわたっている。

(ロ) 三本木原台地米主体畑作従高収益地域生産額構成では米の割合が50%以上であり次いで畑作物は20%前後を占める。水田耕作農家の全農家に対する割合が七戸の70%を最低にしてその他は80%以上の高率で販売農家の収入第一位部門は米で生産目的も販売のためとなっている。畑作物は野菜が主であるがいずれも自給のもので，現金収入のものとして工芸作物があげられる。

(ハ) 三本木原台地北部米作畜産普通収益地域

(ニ) 津軽平野中南部米果樹経営高収益地域

一様に農業粗収益は高いが経営の主体は果樹地域（大鰐，碓ヶ関，相馬），果樹＋米地域（弘前，岩木，藤崎，浪岡，板柳），米＋果樹地域（黒石，平賀，尾上，鶴田，森田，柏），米作地域（田舎館，常盤）と多岐にわたっているが，米と果樹が基幹作物となっている。

(ホ) 津軽平野北部米作単一経営高収益地域

総農家に対する米収穫農家の割合は平内の77%が最低，また収穫農家に対する販売農家は青森の86%，平内の73%を除くと他地域は90%以上の単一商品作物となっている。

(ヘ) 津軽半島北部米作主体低収益地域

水田耕作農家は一部階層に限られている。土地利用でP_{FF}，F_{FP}であるが米及び畑作物の10a当りの土地生産性も県平均を下回る。

(ト) 下北半島部米，畑作経営低収益地域

畑作物の構成比が75～50%の地域（大間，風間浦，佐井，脇野沢）と50～25%地域（むつ，川内，大畑，東通）と大別され米の生産額比と相対する。米の10a当りの収穫量も350Kg以下という低調さでありまた畑作物も3万円未満である。

(チ) 西海岸米作主体的経営低収益地域

(リ) 津軽半島北部畑作経営低収益地域

以上が区分された地域の特徴である。

参考文献

- (1) 尾留川正平（1962）：日本の農業地域区分
地理 Vol. 7, No. 6
- (2) 江波戸昭（1965）：日本農業の地域分析
古今書院
- (3) 伊藤郷平（1965）：経済地理学：大明堂
- (4) 東畑精一（1957）：農業生産の展開構造
農業総合研究所
- (5) 岡本兼住（1965）：農業構造の地域的研究
大明堂